

会議議事録

会議名	令和 8 年度 学校関係者評価委員会
開催日時	令和 8 年 7 月 16 日 木曜日 18 : 30～19 : 55 (1 時間 25 分)
場所	マロニエ医療福祉専門学校 3 号館 視聴覚室
出席者 (敬称略)	①評価委員 川村 祐也 (医療法人常盤会 緑の屋根診療所) 須藤 智宏 (医療法人心救会 小山富士見台病院) 亀田 美智子 (公益社団法人 栃木県看護協会 常任理事) 川中子 有紀 (大澤歯科医院) 菊池 紗衣子 (MO 後援会 会長) 日原 芳行 (マロニエ同窓会 副会長) (計 6 名) ②学校教職員 羽山 潔、(マロニエ 校長)、岩瀬 明雄 (小山歯科 校長)、絹谷 幸男 (事務局長)、 宮内 修 (司会、マロニエ／小山歯科 統括部長)、矢口 剛 (マロニエ 統括部長)、 向山 弘一 (理学療法学科長)、野尻 真生 (作業療法学科長)、 今井 貴子 (看護学科長)、栗田礼子 (歯科衛生学科長)、 半田 享 (広報部長)、小林 秀子 (管理部部長／学生サポートセンター長) 小林 享嗣 (学校評価事務局、学生サポートセンター) (計 12 名)
配布資料	・ 令和 8 年度 学校関係者評価委員会 次第 (事前配布) ・ 令和 7 年度自己点検・自己評価結果 (事前配布) ・ パンフレット一式
進行 議題内容 各詳細は 別紙の通り	1. 開会 (挨拶、配布資料確認) 開会が宣言された後、配布資料の確認を行った。 2. 出席者紹介 (評価委員、学校教職員) 各出席者の自己紹介が行われた。 3. 校長挨拶 岩瀬校長より開会の挨拶が行われた。 4. 学校関係者評価の進め方説明 本会の進め方の説明が行われた。報告書は事前配布のため、その場での読み上げは行わず、内容に対する質疑応答を行う旨が伝えられた。 5. 自己評価結果に対する改善と現状報告 質疑応答及び補足説明 報告に対する質疑応答及び補足説明が以下の順に進められた。(別紙 1) 委員による下記以外のその他意見等は、別途「学校関係者評価報告書」に記載する。

	1. 教育目標・育成人材像について 2. カリキュラムについて 3. 退学率について 4. キャリア形成について 5. 学生の受け入れ募集について 6. 自己点検自己評価の評価値について 7. 学生ボランティアについて 6. 意見交換と学校関係者評価の総評 羽山校長より総評が伝えられた。 —閉会—
--	---

議事記録者：小林享

5. 自己評価結果に対する改善と現状報告 質疑応答及び補足説明

1. 教育目標・育成人材像について

【委員からの意見】

- ・ Q5（業界のニーズに向けての教育目標設定）について、令和 6 年度では 4 評価だが、今回は 3 評価としている。 多方面からの意見・情報をもとに見直しているのであれば評価は変わらないように思うが、評価を下げた根拠と改善策を教えてください。（亀田）
- ・ 理念に基づいた教育が現場に活かせると思う。最新の医療・看護体制、教育体制への移行も検討が必要。（菊池）

【回答・補足説明】（羽山）

「ほぼ適切」という評価であり、現在の実践が不適切という訳ではない。十分に学校に関わる多方面の方の意見をもとに見直しを行っていると考えている。

＜評価を下げたことについて＞

社会人からの入学生、通信制高校からの入学生が増加傾向にある。これは、社会情勢に合わせた本校の方針に基づいた広報や募集の成果でもある。その結果として、学生の年齢、生活環境、学習の履歴、学力などが多様化してきている。

入学生の現状に合わせた学校運営を図るためには、通信制高校出身者や社会人入学生の学びの現状について関係者の意見を聴取したり、入学生のレディネスの把握や学びの特色を分析したりして、エビデンスに基づく本校の教育内容の改善を図ることが求められる。

学校として基礎学力が不十分な学生へのフォローや相談機能の充実など、充実した支援を実施しているところであるが、現実には学校生活を続けられない者が一定数いることを考えると、学生の現状に合わせた教育課程全般にわたる達成目標の見直しや、e-Learning や AI 活用による個別化されたコンテンツによる学習など、一層の改善が求められる。

2. カリキュラムについて

【委員からの意見】

看護学科において、Q4（カリキュラムについて）の評価の根拠に示されている課題についてと、その改善策を教えてください。（亀田）

【回答・補足説明】（今井）

1 学年は卒業後、直接、美容系看護師になりたいと希望して入学した学生が数名いた。病院等で勤務する看護師像をイメージできず、実際の学習に意欲が持てず、欠席が多く成績が低迷した。また、教員も学生指導や対応に迫われ、意欲を引き出す授業の工夫ができなかったことも低迷の要因である。カリキュラム評価を年度末に行い、結果として授業科目、授業時間数や内容、実習展開が学生の背景に合っていないと考察した。令和 9 年度はカリキュラム改正する予定で授業科目の変更、時間数の減少、学習内容の変更を予定している。

3. 退学率について

【委員からの意見】

看護学科において、国家試験合格率が低い結果だったことは残念である。対応策を具体化し次年度に取り組んでいただきたい。

退学率が上昇している学科があることは全体的な課題であると思うが、退学率の減少が図れている学科も見受けられる。各学科の学生の特徴もあると思うが、学校全体としてはどのような取り組みをしているのか。（亀田）

【回答・補足説明】（矢口）

国家試験については、看護学科独自で振り返りをするだけでなく学校全体としても国家試験対策検討会を定期的実施し情報交換をしながら合格率の向上を図っている次第である。

学校全体の取り組みとしては、毎月開催される学科長会議などで情報を共有し各学科の特徴に沿った対応策を検討するなどしている。また、数年前より始業時間を早め放課後に学生対応時間を確保する

ことで勉強のことや友達関係について相談できるような環境確保にも取り組んでいる。更に教員への相談が難しいことも踏まえ金曜日の午後にはスクールカウンセラーを配置している。なお、今年度の話になるが、当法人にはアカデミックキャリアラダー委員会というものがあり、今年の10月に「学生対応ーおもに休・退学問題についてー」といった研修を実施する予定で、次のご意見の回答にあるような、様々な原因にどう対応するのが良いかについて学ぶ予定である。

【委員からの意見】

退学者減少という目標に向けた改善策を議論するにあたり、まずは現状の事実把握が重要かと思う。過去の退学事例の主な要因や、介入によって解決できた事例の成功要因について、学校内でどのように振り返りや共有が行われているか、現在の取り組み状況を伺わせていただきたい。

【回答・補足説明】（矢口）

まず、退学者の最近の傾向では、心の病によるものが特に増えている。様々な診断が下され服薬等でコントロールを試みるも上手くいかず休学を経て退学といったケースが増えてきている。精神科は受診のハードルが高かったが、心療内科が知られるようになり受診しやすくなったことも関係しているかと思われる。診断が下っていることで、出来なくても無理強いをさせないという風潮が保護者にも広がっており、学校としては受け入れざるを得ない状況である。服薬によりコントロールされる場合もあるため、学生の状態を把握することが必要となる。

成績不良者への対応では、早期からの介入と保護者を巻き込んだ対応が功を奏す場合がある。保護者の了解を得ながら春休みなどの長期休暇中に登校させ強制的に勉強時間の確保をすることで、単位認定につながり退学せずにすむケースである。単位未認定による留年は、経済的な理由により退学に直結するケースが増えており、対応を先延ばしにしないことが求められる。

各委員会活動などで、他学科と関わる機会が多くなったため、上記のような情報の共有が何らかの機会でも繰り返されるようになっており、共有という点においては良い方に向かっていると考えている。

→放課後の時間を有効活用できるようにした取り組みは素晴らしいと思う。先輩・後輩間での相談の様子など、学生の上下関係はどういった様子か？（川村）

→学生間だけではなかなか上手くいかない部分もあるので、学科単位で交流できる機会を設けている。
また、授業に卒業生を招いての交流も行っている。(矢口)

4. キャリア形成について

【委員からの意見】

歯科の課題に「就職に関して消極的」、評価に「資格取得に自信が持てないことを理由に就職に対し前向きになれない」とあった。資格の合格率はどの程度なのか。(おそらく「全国合格率」とは異なる印象を受けたので。)

それを踏まえたうえで、学力的に自信が持てずということなのか？(日原)

【回答・補足説明】(栗田)

資格の合格率は全国平均を若干下回る結果となった。「資格取得に自信が持てない事を理由に就職に対して前向きになれない」という表現をしたが、この学生の成績は下位グループではなく、むしろ中堅の位置にいた学生である。

試験にも合格したが、当時は「自信がない」と言い、学校の国試対策も欠席ぎみであった。担任から連絡し、学校に来るように促してはいたが、寝坊して学校に行くのが面倒になった。という状況が2月初めから国試まで続いた。

また、不合格となった学生は現在歯科助手として、採用予定だった歯科医院でスタッフの皆さんに温かく見守られながら、今年度の受験に向けて、勉強も頑張っている模様である。

【委員からの意見】

国家試験前にクラス全員で就職活動を行う時間を設けることで、就職率改善につながるのではないかなと思う。また、これにより全員が国家試験対策に専念しやすい環境が作れるのではないかなとも思った。
(川中子)

【回答・補足説明】(栗田)

就職ガイダンスは毎年7月に学生サポートセンターの職員が実施している。前期の臨床実習が終わり、夏休みに向けて学生が就職活動を本格的に始める時期となるため、その前に学校としての決まりなどもその時に話している。その後は学生のタイミングで学校に届いた求人票を調べる、自分で求人サイトを検索するなどして探している。国家試験の前に決める学生がほとんどだが、ごく稀に国家試験が終わってからゆっくり就活をしたいという学生もおり、学生の学習状況も考慮しながら基本的には自分で判断してもらっている。また、年間通して多くの求人をいただいているので、各自のメンタルを考えながら就職活動をしている。

【委員からの意見】

Q4,5で「適切(4)」と評価された作業療法学科と理学療法学科に質問したい。卒業生や就職先から得られた意見をどのように教育改善へ反映されたのか具体的な事例をご紹介いただきたい。他学科にも参考となる取り組みがあればぜひ共有していただきたい。(須藤)

【回答・補足説明】

・我々が卒業生を通して、学校教育についての意見交換をする機会は、実習地訪問や職能団体のイベントや会合において多々ある。その際に現在のトレンドや学校内で学んだ内容の実用性をアセスメントしている。カリキュラム自体の変更は頻繁にはできないため、シラバスを修正することで対応している。特に3年生以降の授業ではキャリア形成を得た卒業生を非常勤講師として依頼し、現場を意識した内容に触れていただくようお願いしている。また今年度のオープンキャンパスから、卒業生に協力していただき、理学療法士について体験談を含む話をさせていただいている。専任教員による専門科目の内容に関してはAIを活用したフィードバックを行っており、ブラッシュアップに努めている。(向山)

・作業療法学科では、実習指導者会議、実習地訪問、学校祭での卒業生ブース、卒業生による授業などを通して、卒業生や就職先から継続的に意見を伺っている。特に、臨床現場で本校の学生を指導している卒業生は、本校のカリキュラムや実習教育について理解しているため、自身の在学中の経験と現在の臨床経験を踏まえた、具体的な助言をいただくことができる。近年は、学生の知識や技術だけでなく、挨拶、身だしなみ、言葉遣い、報告・連絡・相談、相手に応じたコミュニケーションなど、実習や就職後に求められる基本的態度についての意見が多く寄せられている。

これらの意見を踏まえ学科では、1年次および3年次の実習前に実施するOSCE（客観的臨床能力試験）の評価項目に、身だしなみ、挨拶、言葉遣い、患者役への配慮などの態度面を取り入れている。OSCE終了後には、教員や外部評価者からのフィードバックに加え、学生自身による自己評価を行っている。これにより、知識や技術だけでなく、社会人・医療人としての態度についても、自ら課題を認識したうえで実習に臨めるようにしている。

また、法人全体では教職員の能力開発を目的とした「アカデミックキャリアラダー」を作成している。学生対応力、社会人基礎力、教育実践力などを段階的に高める研修を実施し、卒業生や就職先から得られた意見を、学生教育だけでなく教職員の教育力向上にも反映している。他学科にも応用できる取り組みとしては、卒業生や就職先から得られた意見を個別の情報として終わらせず、授業内容や実技試験の評価項目に具体的に組み込み、評価とフィードバックを繰り返す仕組みを構築することが重要であると考えている。(野尻)

→近年の動向として大学への進学率が上昇している中で、専門学校としては地域の入学者が多いと思うので、卒業後は地域の医療現場へ帰っていくことが強みだと考える。(亀田)

5. 学生の受け入れ募集について

【委員からの意見】

定員を確保できなかった2学科は何科か？

また、その科は社会的にも人気なくなっているのか、それともこの学校だけの課題なのか。(日原)

【回答・補足説明】(半田)

定員未充足となった学科と、それらを取り巻く社会的な動向について回答を行う。

定員に達しなかったのは「看護学科」と「作業療法学科」の2学科である。

社会的・地域的な動向については本校独自の課題ではなく、全国のリハビリ・看護系専門学校が共通して直面している構造的な課題である。

全国的な傾向として少子化が進む中、4年制大学の医療系学部が乱立し、受験生の「大学志向」が急速に強まっている。厚生労働省等の調査(2025年公表)では、全国の看護専門学校の約半数が定員割れを起こし、全体の定員充足率は過去最低の79.5%と初めて8割を割り込んでいる。

また、本校でも定員を充足している「理学療法」に比べ、「作業療法」は全国的に募集難が顕著である。部活動のケガなどから高校生に馴染みのある理学療法に対し、作業療法は仕事内容を具体的にイメージしにくいという背景があるためだ。同調査における専門学校の定員充足率も、理学療法の78.0%に対し、作業療法は52.6%と全国的に大苦戦を強いられている。

栃木県内および近隣エリアにおいても、医療系大学や有力な競合校が複数存在し、限られた受験生の獲得競争が激化している。

今回の結果は厳しい社会的逆風を反映したものだが、本校全5学科のうち3学科ではオープンキャンパス参加者数が増加しており、4学科では出願率が上昇または横ばいを維持している。このことから、本校の教育に対する地域からの信頼は厚く、オープンキャンパスの工夫次第で巻き返しは十分可能であると確信している。

高校生がイメージしにくい作業療法の魅力を丁寧に伝え、本校の強みである「きめ細かな少人数制教育」を前面にアピールする。

在校生や教員との濃密なふれあいを通じて参加者の満足度を高め、確実に出願へと繋げる所存である。

→私自身が学生当時は「これからは福祉だ」というような世間の風潮もあり、1クラス40名が2クラスあるような時代だった。近年では私から見ても同系統の学校が増えたなという印象だったため、こういった質問をさせていただいた。また、最近よく「大学の無償化」という言葉がひとり歩きしているような印象も受ける。進学を考えている高校生の保護者の中でも、制度のことはよく分からないけれども大学が無償化なら専門学校よりも大学を考えている保護者が増えているように感じられる。そういった風潮もあり、専門学校としてはとてもやりづらいご時世なのかなと思うので、専門学校としての強みをどのようにして生かしていけるかを考えなければならないと感じた。(日原)

→看護協会としても全国的に看護職を目指す学生が減ってきている現状がある。日本看護協会としても看護課程を4年制にする動きが出てきていることもあり、県内でも専門学校はとても苦戦している模様だ。看護協会としては、「地域に根差す」というところでは様々なところで普及活動を行っている。

その中では現役生だけでなく、社会人がキャリアチェンジを考えて資格を取る方もいるので、そういった層もターゲットにしながら協力できたらと考えている。(亀田)

6. 自己点検自己評価の評価値について

【委員からの意見】

自己点検自己評価結果の評価結果に前年度の評価値も併記していただけると、改善状況や課題の水位が把握しやすくなり、より客観的な評価ができると考える。(須藤)

【回答・補足説明】(宮内)

自己点検評価は学校側で行っているもので、どういった状況で行ってきたかが理解できている状況で評価をつけている。今回のご意見いただいたことにより、外部委員の方々への配慮が足りなかったと勉強させていただいた。次回以降に関しては、このことを十分に踏まえて検討させていただき、その結果は次年度の評価の際にお出ししたいと考えている。

7. 学生ボランティアについて

【委員からの意見】

学生ボランティア活動を増やしてほしい。授業の一環にしてもよいと思う。(菊池)

【回答・補足説明】(小林)

学校としては、ボランティア活動が学生の人間性を育てる重要な機会になると捉えており、組織的に推奨しているが、ボランティアの本質は自発的な活動なので、授業にすることで強制的な参加や義務感で行う活動になり、教育的効果が薄れる懸念がある。

また、カリキュラムの調整や受け入れ先との調整、活動中の安全管理、評価基準の策定など、現場の負担がさらに増してしまうという課題があり、新たな教科・科目として授業内に組み込むことは厳しいのが現状である。

学校としては、授業化ではなく、現状のカリキュラムのまま、活動を促すための現実的な案として、学生が自主的に参加できるような「情報提供の強化」や「自主活動のサポート」という形でボランティア活動の機会を増やしていく方向で検討していく。

→そもそも「ボランティアとは何なのか」といったことが理解できていない学生もいるかと思うので、取り掛かりを教えてあげることも重要かと考える。(川村)

→昨年看護の方では障がい者スポーツや病院のお祭り等参加させていただいた。参加を募る形式にしたところ、10人前後の参加があり、病院の仕組みやスタッフとの関わり、対象者との接し方等学び得ることも多かった。そのような現状があったため、授業として行うには難しいところがある。今年は看護学科内でもボランティアサークルを立ち上げ、既に活動しているため、そちらが軌道に乗ればこれまでもよりもボランティア精神というものが養われていくと考える。(今井)